

大阪商業大学学術情報リポジトリ

JGSS-2006から見た日本におけるモンゴル国の好感度ー東アジア各国・地域との比較検討ー

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2019-07-11 キーワード (Ja): キーワード (En): JGSS, Mongolia, favorability of countries 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/707

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



JGSS-2006 から見た日本におけるモンゴル国の好感度

- 東アジア各国・地域との比較検討 -

湊 邦生

大阪商業大学 JGSS 研究センター

Favorability of Mongolia in Japan Seen From JGSS-2006:
Comparison With East Asian Countries/Region

Kunio MINATO

JGSS Research Center

Osaka University of Commerce

Relationship between Japan and Mongolia has been expanding since Mongolia abandoned its socialist system in 1990. Then, how do the Japanese feel about this “new” neighbor? And what are the factors associated with it? To answer these questions, the author examined favorability of Mongolia and made a comparative analysis with other East Asian countries and region (South Korea, North Korea, China and Taiwan), using JGSS-2006 data. The results are the following: First, favorability of Mongolia is the second highest after Taiwan. Second, amount of reading books has significant positive effect on the favorability, which might reflect the popularity of Japanese literatures featuring Mongolia or Mongolian figures. Third, males are more likely to have favorable feeling toward Mongolia than females are. Fourth, Mongolia makes favorable impression residents in especially in Kanto area. JGSS-2006 is virtually the first social survey which asks favorability of Mongolia to the Japanese, and the results of analysis shown in this article are expected to deepen mutual understanding between Japan and Mongolia.

Key Words: JGSS, Mongolia, favorability of countries

1990年にモンゴル国が社会主義体制を放棄して以来、日本とモンゴル国との関係は拡大を続けている。その中で、日本人はモンゴル国にいかなる印象を抱いているのであろうか。また、モンゴル国への印象の背景には、いかなる要因が存在するのであろうか。本稿ではJGSS-2006のデータを用い、モンゴル国の印象および、独立変数との関連について、東アジア諸国・地域（韓国・北朝鮮・中国・台湾）との比較分析を行った。分析の結果、(1)東アジア諸国・地域のうち、モンゴルの好感度は台湾に次いで高い、(2)読書量がモンゴルの好感度に有意な正の影響を与えている、(3)モンゴルの好感度は男性の方が女性より有意に高い、(4)モンゴルの好感度は関東において有意に高いという4点が判明した。モンゴルの好感度に関する調査はJGSS-2006が実質的に初めての試みであり、これらの結果が日本とモンゴルとの相互理解の深化に寄与することが期待される。

キーワード：JGSS，モンゴル，国別好感度

1. はじめに

「十三世紀と二十世紀のある期間をのぞいては、長い日蒙の歴史の上で交渉は全くなかった」と司馬遼太郎が書いてから、20年以上が経過した(司馬, 1978)。「十三世紀」とは元寇のことであり、「二十世紀のある期間」とは、日本の旧満州進出から「ノモンハン事件」(モンゴル語では「ハルハ側戦争」)を経て、敗戦に至る時期である。確かに、かつて世界で2番目の社会主義国であり、旧ソ連の忠実な兄弟国であったモンゴル⁽¹⁾は、日本にとって縁遠い国であったが、1990年にモンゴルで民主化が実現し、市場経済化が始まって以来、両国の関係は急速に拡大し続けている。

こんにち、日本はモンゴルにとって最大の援助供与国である。2005年のモンゴルに対する日本の経済協力実績は5648万ドルで、2位のドイツ(2817万ドル)の倍となっているほか、国際機関による経済協力実績の合計(5398万ドル)をも上回っている(外務省ホームページ)。加えて、日本からの観光客はモンゴルに外貨収入をもたらしており、中国・ロシアの両大国に挟まれたモンゴルにとって、日本は「第3の隣国」としての重要性を有している。

他方、日本にとって現在のモンゴルは東アジアにおける貴重な親日国である。表1にはモンゴル国立大学社会調査研究所が実施した世論調査⁽²⁾の結果から、日本を含む外国へのイメージに関する設問の回答結果について掲載している。調査概要等不明な点はあるものの、モンゴル人の日本に対する親近感の一端が表れている。しばしば歴史認識や領土問題によって対立が起きる韓国・中国や、いまだ国交を有しない北朝鮮と比較すれば、モンゴルの親日性は際立っている。日本国民にとっても、大相撲でのモンゴル力士の増加と活躍などにより、「モンゴル」という言葉は以前とは比較にならないほど身近になったと言えよう。

表1 モンゴルにおける対日世論調査の結果(抜粋)

Q1. あなたのもっとも好きな国はどこですか(複数自由回答)。	Q2. あなたが是非行ってみたいと思う国はどこですか(複数選択回答)。	Q3. 今後モンゴルが最も親しくすべき国はどこだと思いますか(複数選択回答)。
1 米国 41.8	1 米国 40.8	1 日本 37.4
2 日本 33.4	2 日本 31.3	2 米国 35.1
3 韓国 23.9	3 韓国 15.9	3 ロシア 28.2
4 ドイツ 10.4	4 フランス 14.3	4 韓国 14.0
5 フランス 8.4	5 ドイツ 11.9	5 中国 10.4
6 英国 8.1	6 英国 11.5	6 ドイツ 10.4
7 ロシア 7.5	7 ロシア 4.8	7 英国 9.3
8 中国 5.8	8 北朝鮮 4.3	8 フランス 6.6
9 北朝鮮 0.8	9 中国 3.8	9 北朝鮮 4.4
	10 その他 0.9	10 その他 0.6

資料：外務省ホームページ

このような中で、日本人がモンゴル人に対して持つ印象は、いかなるものであろうか。また、モンゴルに対する印象には、いかなる要因が関わっているのであろうか。そして、それら要因との関連に、いかなる特徴が見出されるのであろうか。これらの課題を解明することは、日本人の外国観の構造解明の一助となろう。また、モンゴル国民にとって、自国に対する日本人の印象を知ることは、日本人および自身への理解を深めることにもつながる。さらに、以前の研究で示されたように、被援助国への好感度は途上国援助の重要な規定要因の1つであり、好感度の解明は援助観の研究においても重要な意義を持つ(湊, 2008)。

本稿ではJGSS-2006のデータに基づき、モンゴルの好感度について分析を行う外国・地域の好感度に関しては、内閣府の「外交に関する世論調査」などが挙げられるが、それらにおいてモンゴルが含まれたことはない。後述する楠による民族好感度の調査で「蒙古人」が含まれた例を除けば(楠, 1939, 1941, 1951)、国別好感度設問にモンゴルが含まれるのは、JGSS-2006が初めてのことである。

また、分析においては、モンゴルと東アジア各国・地域(韓国・北朝鮮・中国・台湾)の好感度との比較が中心となる。モンゴルが世界のどのエリアに含まれるかは単純な問題ではないが、モンゴルは民主化・市場経済化開始以降、日本・韓国・中国という東アジア諸国との関係を拡大させており、

地理的にもこれらの国々の近隣に位置している。さらに、モンゴル高原の遊牧民族と漢民族とが接触し続けてきた歴史を考えれば、モンゴルを東アジアの一員としてとらえ、域内の国・地域との比較分析を行うことは、十分な妥当性を有するものと考えられる。

本稿の構成は以下の通りである。2.では日本人が持つモンゴルのイメージに関する研究を検討した上で、日・モ両国関係史および、両国間の人的移動の統計から、モンゴルの好感度に関する仮説を導出する。3.では JGSS-2006 のデータから、モンゴルを含む東アジア各国・地域の好感度および、関連する要因を分析し、2.での仮説の検証と、モンゴルの好感度が持つ特徴の解明を試みる。4.は以上の議論のまとめである。

2. 日本から見たモンゴル

2.1 先行研究の整理

日本人が持つモンゴルのイメージに関する研究は、前述の楠（1939, 1941, 1951）による学生を対象とした調査にさかのぼる。この調査は「蒙古人」を含む 15 の国民・民族について、回答者が好感度に基づいて順位を回答するものである。集計結果を見ると、「蒙古人」は 1 回目の調査では 6 位であったのが、2 回目は 9 位、3 回目は 13 位となっている。ただし、当時の社会状況を考えれば、回答者の大多数が「蒙古人」として旧モンゴル人民共和国（現モンゴル国）ではなく、南モンゴルや、旧満州のモンゴル人を想定したと考える方が自然である。

この調査結果が報告されて以降、モンゴルのイメージに関する研究は長らく見られなかったが、1990 年代に入ると再び現れるようになった。芝山（1998, 2007, 2008）による一連の研究は、日本文学のテキスト研究を基に、日本人が持つモンゴルへのイメージについて批判的に検討している。日本文学に現れるモンゴルやモンゴル人の描写が、歴史的事実から逸脱している例を列挙し、その背景として、日本人が形成したステレオタイプをモンゴルに対して押しつけるという「日本的オリエンタリズム」、すなわち、Said（1978）が再定義し批判した「オリエンタリズム」の日本版の存在を指摘した。すなわち、日本人は概してモンゴルに好感を持っているものの、それは日本人が現実のモンゴルやモンゴル人とは乖離したところで想像した、「自分が見たいと思っているモンゴル」（芝山, 1998:45）に対する好感であるとの指摘がなされている。これには筆者も同感であるが、「日本的オリエンタリズム」の存在を確認するには、書かれたテキストの検討と同時に、テキストを読む側の意識の解明も必要となろう。特に、果たしてモンゴルに対する日本人の意識が実際に肯定的なものかどうかについては、検証が必要である。

モンゴルのイメージに関する研究としては、史学によるアプローチも存在する。片倉(1998)は文献資料に基づき、「蒙古」「高麗」から派生したとされる「ムクリ」「ムクリコクリ」等の言葉の残存状況を調べたほか、日本全国の都道府県立図書館等を対象に、元寇やモンゴルについて伝えたことば、ことわざや民謡等についてのアンケート調査を行った。それらの結果から、元寇で戦場となった九州北部のみならず、他の地方でも、「ムクリ」「ムクリコクリ」等の言葉が残っている例や、元寇の犠牲者を弔う石碑が建立されている例が確認された。以上から、片倉は元寇の際の恐怖心が今日でも日本人の多くに影響を及ぼしていると論じている。ただし、この研究では「ムクリ」「ムクリコクリ」などの言葉について、使い手が語源を認識した上で用いているかどうかを示されていない。元寇から 700 年以上経過した現代において、これらの言葉がモンゴルへの恐怖心を喚起するために使われているかどうかは疑問である。

さらに、片倉（2004）では元寇の影響に加えて、日本人のモンゴル観が中華思想の影響による遊牧・狩猟民族蔑視によっても形成されたと論じている。遊牧や狩猟よりも農耕をより進んだものと位置づけ、モンゴルなど北方民族への偏見を持ち続けてきたという見方である。しかし、ここでは日本人が持つモンゴル観自体が示されていない。氏の議論を検証するためには、あらたに日本人のモンゴル観を示す必要がある。

以上の研究を検討する限り、現在の日本人が持つモンゴルへのイメージについて、直接示したもの

は存在しない。本稿はJGSS-2006 データに基づき、モンゴルの好感度に関する個票分析を行うことで、このような欠落の打破を試みるものである。ただ、分析を行う前に、モンゴルの好感度と関連がありそうな要因として、いかなるものが挙げられるかを考えることは有益であろう。そこで、次に日本とモンゴルとの関係の歴史や、両国間の人的移動に関する統計資料から、モンゴルの好感度と関連する要因について、いかなる仮説が成り立つか検討したい。

2.2 20世紀以降の日本・モンゴル関係

前述の司馬(1978)にもあるように、日本とモンゴルとの関係は、元寇以後の長い空白の期間に入る。日本とモンゴルとが国家として接触するようになるのは、1911年、それまで清朝支配下に置かれていたモンゴルが独立を回復してからのことである。ここでは表2に示した日本・モンゴル関係の年表を軸に、両国の関係の歴史を、(1)戦前・戦中期(1911-1945)、(2)冷戦期(1946-1990)、(3)ポスト民主化期(1991-)の3つに分けたうえで概観する。

表2 20世紀以降の日本・モンゴル関係史概略

年	出来事・事件
1911	辛亥革命、北モンゴル(現在のモンゴル国にほぼ相当)独立
1921	モンゴル人民革命
1924	モンゴル人民共和国成立/小谷部全一郎『成吉思汗ハ源義経也』刊行
1931	満州事変
1932	満州国成立
1936	廣田内閣「満州開拓移民推進計画」決議、日本から「満蒙」への移住本格化
1937	南モンゴルに蒙古聯盟自治政府成立/旧日本陸軍、駐蒙兵団(のちの駐蒙軍)編制
1939	ノモンハン事件(ハルハ川戦争)/蒙古聯合自治政府成立
1941	関東軍特別大演習/蒙古聯合自治政府、蒙古自治邦に改称
1945	モンゴル・ソ連対日参戦/満州国・蒙古自治邦崩壊/日本、ソ連・モンゴルに降伏/日本人捕虜のモンゴル強制抑留開始
1960	井上靖著『蒼き狼』刊行
1967	大塚勇三再話・赤羽末吉画『スーホの白い馬』刊行
1972	日本・モンゴル国交樹立
1973-1974	司馬遼太郎『街道を行く5 モンゴル紀行』連載
1974	日本・モンゴル文化交流取極締結
1977	日本の無償資金協力でウランバートルにカシミア工場建設
1989	宇野外相、日本の大臣としてモンゴル初訪問/モンゴルで民主化要求デモ発生
1990	モンゴルで複数政党制導入、市場経済への移行決定/オチルバト大統領、モンゴル元首として初来日
1991	海部首相、日本の総理としてモンゴル初訪問/日本、モンゴルへの最大の援助国に/旭鷲山・旭天鵬らモンゴル人初の力士来日
1992	モンゴル国成立
1992-1993	モンゴルでゾド(雪害)発生、日本より救援物資・資金贈与
1995	阪神・淡路大震災発生、モンゴルより救援物資贈与/旭鷲山、モンゴル人初の十両昇進
1996	旭鷲山、モンゴル人初の新入幕/日本・モンゴル間直行便定期就航開始
1999-2000	モンゴルでゾド発生、日本より救援物資・資金贈与
2000-2001	モンゴルで再度ゾド発生、日本より救援物資・資金贈与
2001	エンフバヤル首相来日
2002	秋篠宮同妃両殿下モンゴル訪問/朝青龍、モンゴル人初の大関昇進
2003	朝青龍、モンゴル人初の横綱昇進/バガバンディ大統領来日
2004	新潟県中越地震発生、モンゴルより救援物資・義捐金贈与
2006	エンフバヤル首相来日/小泉総理大臣モンゴル訪問/「日本におけるモンゴル年」開催

資料:有馬(2002)、ボルドバートル(1998)、井上(1960=1964)、小谷部(1924)、三瀬(1993)、宮脇(2002)、大塚(1967)、Rossabi(2005)、外務省ホームページ。

(1) 戦前・戦中期(1911-1945)

この期間、モンゴルは一度独立を果たしたのち、独立取り消しやロシア白軍による占領などの紆余曲折を経たが、1921年に人民革命が成功すると、1924年に「モンゴル人民共和国」が成立し、旧ソ連に次ぐ2番目の社会主義国として国家建設をはじめた。これに対し、朝鮮半島から旧満州へと進出し

ていた日本は、満州事変を契機に満州国を成立させ、モンゴルと直接境界線を接するようになった。この間、日本からいわゆる「満蒙」への殖民が進む一方で、南モンゴルの民族勢力には、関東軍を中心とした支援が行われた。これにより、モンゴルは日本の勢力を脅威と捉えるようになった。その結果、1939年に勃発したのが「ハルハ側戦争」、日本でいう「ノモンハン事件」である。結果として大敗を喫した日本は、以後旧ソ連・モンゴルとの交戦を避けるようになるが、1945年8月にソ連が日本に宣戦布告を行うと、モンゴルも対日戦に加わり、旧満州や日本勢力下の南モンゴル民族勢力は瓦解した。さらに、旧満州にいた約1万2千人の日本人男性がモンゴルで強制抑留連行され、首都ウランバートルの都市建設に使役され、うち16名あまりが現地で死亡した(バトバヤル、インターネット公開論文)。

ここで見てきたように、当時日本とモンゴルとは基本的に対立関係にあった。ただし、日本が過去植民地としていた朝鮮半島や、日中戦争の対戦国であった中国と比較した場合、対立および衝突が深刻でなかった点を見逃してはならない。一方で、この時代を見てみると、1924年に小谷部全一郎が『源義経八成吉思汗也』を刊行し、大きな反響を巻き起こした⁽³⁾ほか、「満蒙」への殖民の奨励など、「蒙古」、当時の認識における「モンゴル」に対し、親近感や好意的イメージをもたらすような動きが見出される。ただし、当時の日本では「外蒙」(モンゴル人民共和国)よりも、「満蒙」の方が、はるかに身近な「モンゴル」であった点は留意すべきであろう⁽⁴⁾。

(2) 冷戦期(1946-1990)

第2次大戦後、いわゆる西側陣営に加わった日本は、ソ連の兄弟国であるモンゴルとの交流をほとんど持たなかった。加えて、中ソ対立によって、日・モ両国の間に位置する中国とモンゴルとの関係が悪化すると、日本とモンゴルとの交流はさらに困難になった。1972年には両国間で国交が樹立されるが、その後も両国間関係に目立った動きはない。1980年代後半になると、旧ソ連のペレストロイカの影響のもと、モンゴルでも改革の動きがはじまり、日本との関係改善への条件が整い始めた。しかし、それが実を結ぶのは、1989年に発生したモンゴル民主化デモの結果、1990年に社会主義体制が放棄されてからのことである。

このように両国間関係が乏しいにもかかわらず、モンゴルを題材とした文学作品が人気を博することがあった。そのような例としては、井上靖の代表作の1つに数えられる『蒼き狼』(井上, 1960=1964)のちに小学校の国語教科書にも掲載された『スーホの白い馬』(大塚再話, 1967)、司馬遼太郎のライフ・ワークと言われる『街道をゆく』のモンゴル編(司馬, 1978)が挙げられる。これらの作品で描かれたモンゴル像の中には、モンゴルにおける史実や現実に照らして疑問を呈せざるを得ないものも存在するが(芝山, 前掲書)、これらの作品が読者に対し、モンゴルへの好感を促した面も否定しがたい。

まとめると、この時期日本とモンゴルとの関係は非常に乏しかったものの、あるいは、乏しかったがゆえに、モンゴルへの好感が醸成されていたと考えられる。

(3) ポスト民主化期(1991-)

旧ソ連ブロックの崩壊、モンゴルの民主化・市場経済化の開始によって、日本・モンゴル両国間の関係拡大の障壁は取り払われた。この時期両国間で要人の往来が活発化したほか、モンゴルでの国内旅行自由化、日本・モンゴル間定期直行便就航などにより、一般レベルでも日本とモンゴルとの間で人的移動が急増した⁽⁵⁾。さらに、日本はかつての援助供与国旧ソ連に代わり、モンゴルに対し大規模な援助を行うようになった。一方で、1995年阪神・淡路大震災、2004年新潟県中部地震の際には、モンゴルから日本へ緊急物資が贈与されており、これらの出来事にも、両国間の良好な関係が表れている。

この時期の日・モ関係において特筆すべき事柄は、大相撲におけるモンゴル力士の躍進であろう。1991年に初めてのモンゴル力士が大島部屋に入門して以来、モンゴル力士は人数・地位いずれの

面においても、大相撲の中で無視できない勢力を築き上げた。大相撲でのモンゴル人力士の活躍が、日本人に「モンゴル」への親近感と関心を与えたことは、容易に推察することができる⁽⁶⁾。

以上、3つの時期に分けて、日本・モンゴル関係史について見てきた。ここから、日本人が持つモンゴルのイメージに関し、歴史を通じてほぼ一貫したプラスのイメージや、直接接触の乏しさに反した文学作品・文献への注目という2点を見出すことができる。

このうち、前者の一貫したプラスのイメージについて見てみると、日本とモンゴルとの間では、(1)で見たような軍事衝突の歴史もあったものの、朝鮮半島・中国などと比べれば、政治的対立は比較的軽微であった。一方で、各時代を通じてモンゴルへの好感を促すような出来事が見られる。以上を考えれば、モンゴルの好感度は、他の東アジア諸国・地域よりも高いと推測される。

次に後者であるが、(2)で挙げた以外にも、モンゴルやモンゴル人を描いた作品はしばしば公刊されている。鈴木(2007)が指摘するように、チンギス・ハーンに関して戦後を通じて多くの小説が刊行されたほか、文学作品以外にも、前述の『源義経八成吉思汗也』など、モンゴルに関する文献・文学作品が注目を集める例は決して少なくない。本稿の目的とは異なるため、それらの列挙は避けるが、ここで特筆すべきは、それらの作品において、筆者が調べた限り、モンゴル人が悪役となるものがない点である。モンゴル人が悪く描かれていないのであれば、それらの作品や文献を多く読むほど、モンゴルへの好感が増すであろう。

以上の2点から、日本人に対するモンゴルの好感度について、次の2つの仮説を提示することができる。

仮説1：モンゴルの好感度は、東アジア各国・地域よりも高い。

仮説2：読書量がモンゴルの好感度に正の影響を与える。

次に、日本・モンゴルの人的交流の傾向から、モンゴルの好感度に関するさらなる仮説導出を試みたい。

2.3 日本・モンゴル間の人的交流

法務省が毎年刊行している『出入国管理統計年報』では、日本からモンゴルへの出国者および、モンゴルから日本への入国者が示されている。このうち出国者については、1980年から2000年の間に限り、男女・世代・住所地(都道府県)別の集計がまとめられている⁽⁷⁾。日本からモンゴルの出国者の多くは観光目的であるとされることから、モンゴルへの出国者が多い層は、好んでモンゴルに赴く層、すなわち、モンゴルに対して好感を持っている層であるという仮説が成り立つ。そこで、本項ではそれぞれの区分による出国者の総数を集計し、その結果から、実際にいかなる仮説が成り立つか検討する。

まず、男女別統計について見ると、男性が約6割、女性が約4割と、男性の方が多くなっている(図1)。実際、統計が存在するすべての期間において、男性の出国者数は女性の出国者数を上回っていた。前項で見たモンゴルを題材とした文学作品は、男性の読者により好まれるものと考えられることから、この傾向は不自然なことではない。ここから、モンゴルの好感度について、以下の仮説が考えられる。

仮説3：モンゴルの好感度は、女性よりも男性において高い。

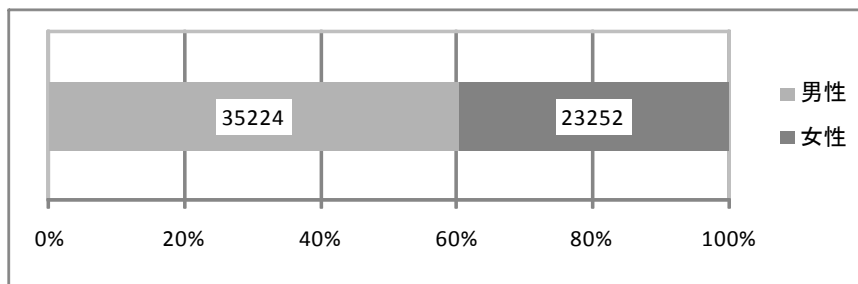


図1 男女別モンゴル出国者数総計(1980-2000・グラフ内数字は人数)

資料：法務省大臣官房司法法制調査部、年刊。

次に、世代別の集計結果を見てみよう。図2に見られるように、モンゴルへの出国者の年代別比率は、50代を除き、年代が上がるとともに減少している。例外は50代であるが、これは1998年から2000年の3年間にかけて、シェアが拡大したことに伴うものである。このことから、モンゴルの好感度について、以下の仮説が考えられる。

仮説4：モンゴルの好感度は、年代が下がるにつれて下降する。

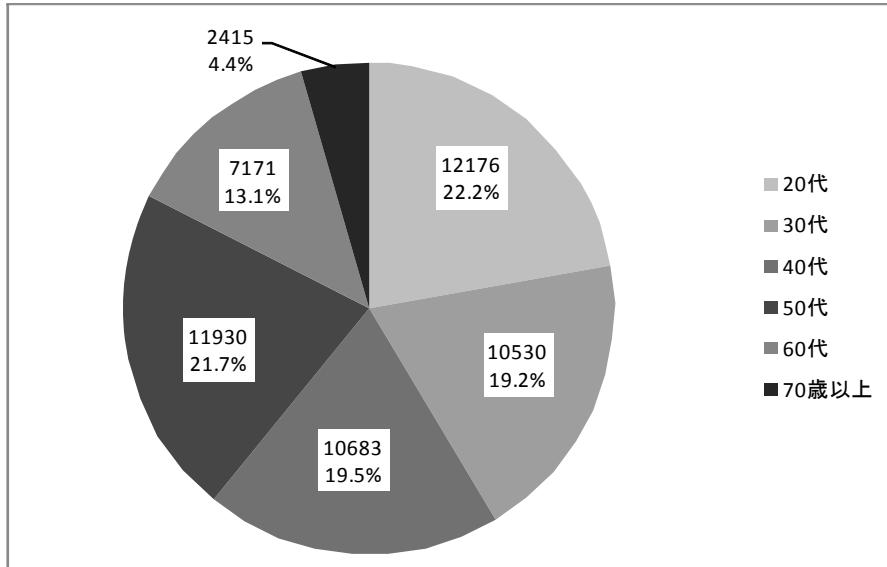


図2 年代別モンゴル出国者数総計（1980-2000・グラフ内数字は人数）
資料：法務省大臣官房司法法制調査部，年刊。

最後に、居住地ごとの出国者数集計結果について見てみよう。図3は居住地都道府県別の集計を、内閣府「外交に関する世論調査」の集計表に記載された地域ブロックに基づき再区分した結果である。図から明らかなように、関東の出国者数が明らかに多い。出国者数の半数程度というシェアは、人口比のみによって説明できるものではない。このことから、もう1つの仮説が考えられる。

仮説5：モンゴルの好感度は、関東において高い。

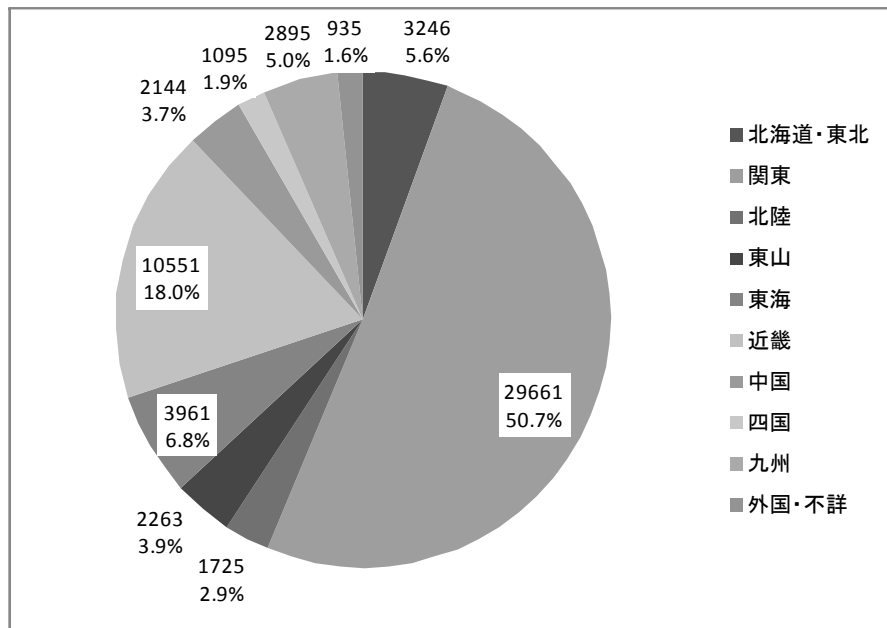


図3 居住地別モンゴル出国者数総計（1980-2000・グラフ内数字は人数）
注：「東山」は山梨、長野、岐阜の3県を含む。
資料：法務省大臣官房司法法制調査部，年刊。

答(1~3)の合計は28.4%で、好ましくないとする回答をはるかに上回っている。好ましいとする回答が好ましくないとする回答を上回っているのは、モンゴル、韓国、台湾の3ヶ国・地域であり、韓国では好ましくないとする回答が合計で20%を上回っている。前項で仮説1として、モンゴルの好感度が東アジアにおいて高いというものを提示したが、台湾を除けば、図4はこの仮説に沿った結果を示している。

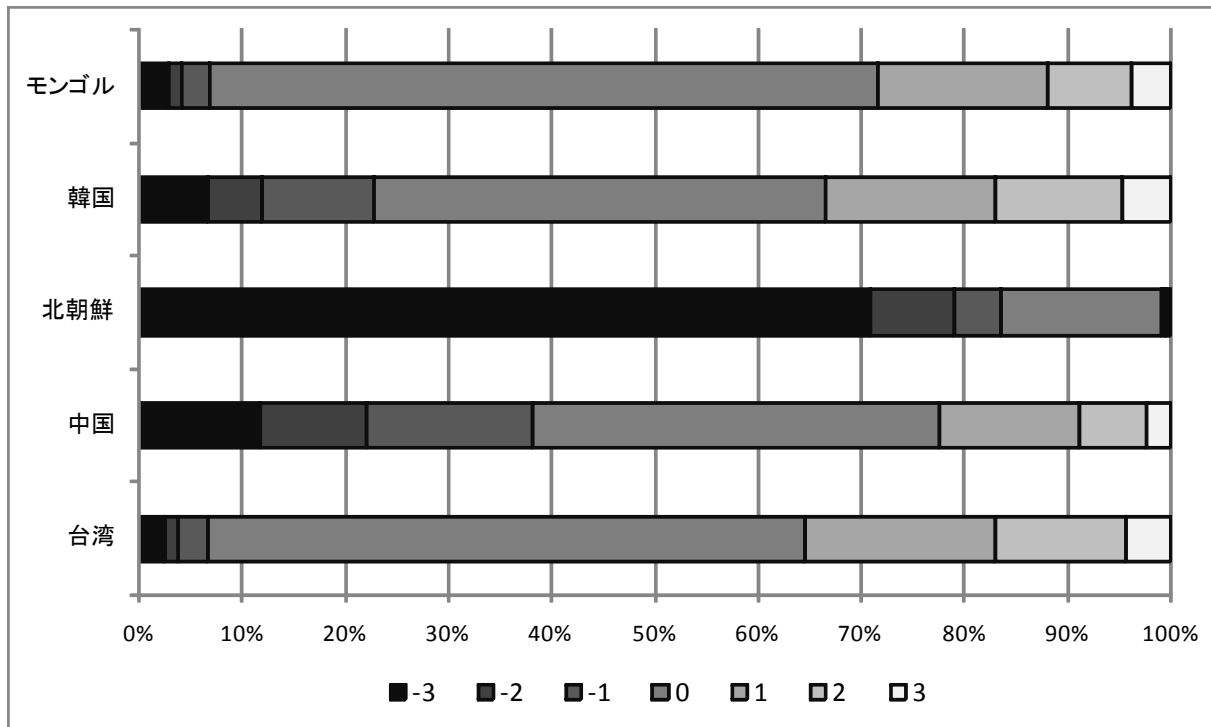


図4 モンゴルおよび東アジア諸国・地域の好感度集計結果

しかし、これだけで台湾を除き仮説が支持されたとするのは早計であろう。加えて、他の仮説についての検討も必要である。以下、前項で見た5つの仮説について、順に検証していく。

3.3 仮説の検証(1): 好感度の国際比較と検定

最初に、仮説1について検証するために、東アジア各国・地域好感度の平均値について検討する。表3は各国・地域好感度の基本統計量をまとめたものである。モンゴルの好感度の平均値は台湾に次いで高く、図4と符合する内容が示されている。

表3 東アジア5ヶ国・地域好感度の基本統計量

	N	平均値	標準偏差	最小値	最大値
モンゴル	2023	.30	1.040	-3	3
韓国	2023	.14	1.408	-3	3
北朝鮮	2023	-2.32	1.192	-3	3
中国	2023	-.38	1.447	-3	3
台湾	2023	.44	1.092	-3	3

これら5ヶ国・地域の好感度の平均値について、Friedman検定を行った。結果は表4の通りであり、0.1%水準で有意な差があると認められた。

表4 Friedman 検定の結果 (東アジア 5 カ国・地域の好感度平均値)

χ^2	自由度	p
2774.989	4	0.000

さらに、これらの国・地域の好感度のうち、いずれの平均値の間に有意な差があるのかを検討すべく、Schefféの方法による多重比較を行った⁽⁸⁾。結果は表5の通りである。

表5 Schefféの方法による多重比較の結果

	S_{ij}	p
モンゴル : 韓国	6.978586	0.137
モンゴル : 北朝鮮	2650.182934	0.000 ***
モンゴル : 中国	257.010926	0.000 ***
モンゴル : 台湾	15.202814	0.004 **
韓国 : 北朝鮮	2385.172337	0.000 ***
韓国 : 中国	179.288325	0.000 ***
韓国 : 台湾	42.781802	0.000 ***
北朝鮮 : 中国	1256.586735	0.000 ***
北朝鮮 : 台湾	3066.834314	0.000 ***
中国 : 台湾	397.230367	0.000 ***

*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05 + p<0.1

表5に示された通り、モンゴルと韓国との間では有意な差が見られず、モンゴルの好感度が韓国より高いという仮説は保留される。しかし、北朝鮮・中国・台湾の間では、0.1%水準で有意な差があると認められた。ただし、表3で見たとおり、モンゴルと台湾とでは、台湾の方が好感度において上回っており、モンゴルの好感度が有意に上回っているのは、北朝鮮・中国の2ヶ国となる。

以上の結果から、韓国・台湾を除いた東アジア各国・地域との比較において、仮説1は支持される。

3.4 仮説の検証(2)：独立変数と好感度との関連

次に、仮説2~5について検証しよう。図5はそれぞれの仮説に関する独立変数と、各国・地域好感度との関連について、一元配置分散分析を行った結果をまとめたものである。このうち、読書冊数は仮説2、性別は仮説3、年代は仮説4、地域は仮説5にそれぞれ対応している。

各変数との関連について国際比較を行った理由は次の通りである。モンゴルの好感度とある変数との有意な関連が見出された場合、その関連はモンゴル特有、あるいはモンゴルを含む特定の国や地域に特有のものである可能性と、外国・地域の好感度一般に見いだされる可能性の2つがある。もしモンゴルの好感度についてのみ注目し、他国・地域についての検討を怠った場合、後者の可能性を見落とす危険が存在するのである。以上から、本稿ではモンゴルと東アジア諸国・地域の好感度について、各変数との関連を分析し、結果を比較するという手法を採択した。

まず1ヶ月の読書冊数について見ると、2冊から3冊に増加した場合を除き、モンゴルの好感度は読書冊数が増加するにしたがって上昇している。他国・地域をみると、読書冊数と好感度の間に有意な関係があるのは台湾のみであり、また台湾でも両者の間に正の比例関係があるとは言いがたい。したがって、仮説2はモンゴルのみにおいて支持される。

性別との関連を見ると、仮説3にあるとおり、モンゴルの好感度は女性よりも男性において高い。これは台湾でも同様であるが、韓国・中国・北朝鮮ではこのような関係は存在しない。このことから、東アジア各国・地域全般において、男性に対する好感度が女性に対するものよりも高い、という可能性は否定される。したがって、仮説3は支持される。

年代を見ると、モンゴルの好感度との関連は有意となっているが、好感度が最も高いのは 40 代であり、それを除けば、年代の上昇とともに好感度が一応下降しているものの、反比例関係が成り立つとはいえない。したがって、仮説 4 は支持されない。

さらに、地域ブロックと好感度の関連について見ると、関東におけるモンゴルの好感度が最も高くなっている。他国・地域において、両変数間に有意な関連が見られるのは台湾・北朝鮮であり、台湾の好感度が最も高いのが四国、北朝鮮については中国地方となっており、関東において各国・地域の好感度がすべて高いということはない。このことから、仮説 5 は支持される。

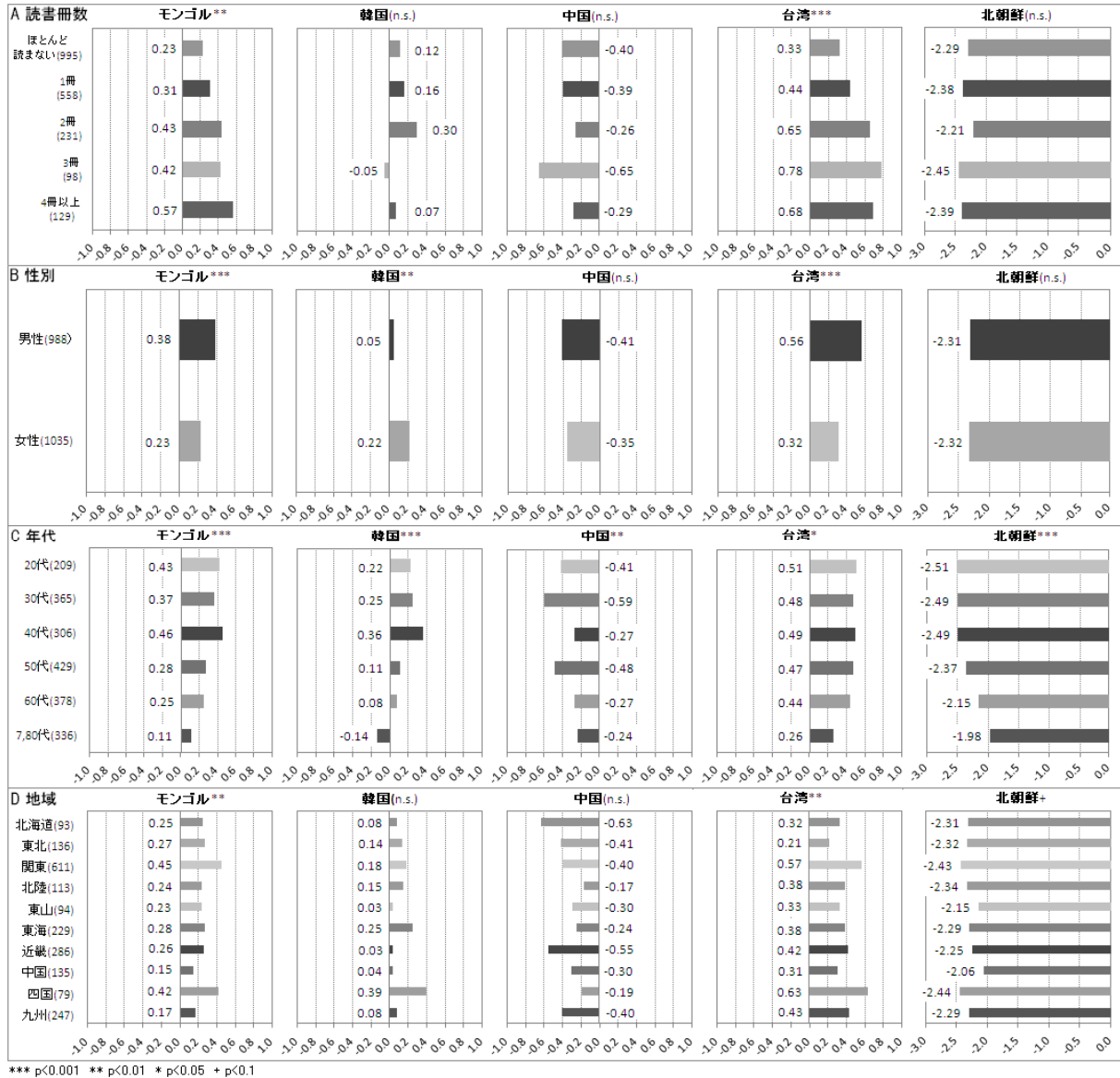


図 5 独立変数と国別好感度の関連（1. 仮説検証）

注：北朝鮮の好感度が他国と大きく異なっていることから、北朝鮮のみグラフの範囲が異なる。そのため、調査票での順番とは異なり、北朝鮮を右端に置くこととした。

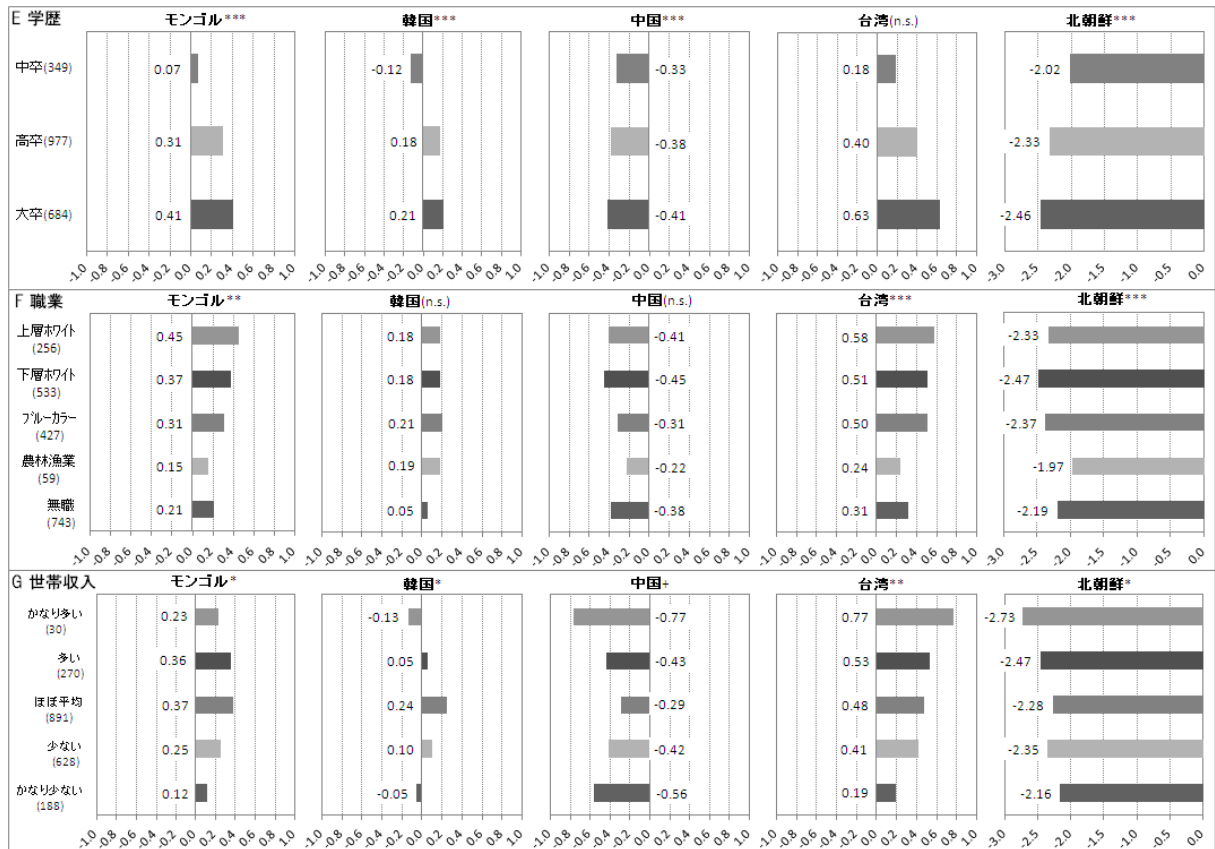
3.5 その他各独立変数との関連の国際比較

前項では仮説検証を目的に、独立変数と好感度との関連を見てきた。ただ、それら以外の変数の中にも、モンゴルの好感度との関連を持つものが存在する可能性がある。そこで、前項で見た以外の独立変数のうち、モンゴルの好感度との関連が考えられるものについて、一元配置分散分析を試みた。以下、(1) 制御変数、(2) 政治・人間観、(3) 対外接触の3つに分けて見ていく⁽⁹⁾。

(1) 制御変数

前項で見た変数以外に制御変数として考えられるのが、学歴⁽¹⁰⁾・職業⁽¹¹⁾・世帯収入の3つである。このうち、学歴については、上昇するとともに外国人への感情が改善することが排外意識の研究から示されているが(Nukaga, 2005)これがモンゴルという国についても成立するかどうかが焦点となる。また職業については、移民労働者と職業上の競合が起こり得るブルーカラー層の場合、外国人への排他性が高くなるとする研究がある(笠間, 1992)一方、JGSS第1回予備調査データの分析では、そのような傾向は確認できておらず(田辺, 2004)全国調査データの分析において、いかなる結果が出るかが注目される。さらに、上記の研究では所得水準が分析に含まれていないが、前述の笠間(1992)では、排外意識の高揚の背景として生活水準の低下や経済的衰退が挙げられていることから、経済水準が国別好感度に負の影響を与えている可能性について、検証する必要がある。

上記の変数と国別好感度との関連についてまとめたのが、図6である。学歴を見ると、中卒・高卒・大卒と上昇するにしたがって、モンゴルの国別好感度も上昇していることが分かる。また職業について見ると、上層ホワイト・下層ホワイト・ブルーカラー・農林漁業の順に好感度が低下している。世帯収入については線型の関連は見出されず、むしろ平均から離れた層において、好感度が低いという結果が出た。



*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05 + p<0.1

図6 独立変数と国別好感度の関連(2.基本属性)

(2) 政治意識・人間観

ここでは、回答者の政治意識及び人間観とモンゴルの好感度との関連を検討する。分析の結果は図7に示されている。

冒頭で述べたように、モンゴルはかつて世界で2番目の社会主義国であり、70年近く社会主義体制を維持してきた。そのため、保守層よりも革新層において、モンゴルの好感度が高い可能性が考えられる。しかし、分析の結果からはそのような傾向は観察されなかった。背景としては、モンゴルで民主化・市場経済化が始まって以来15年が経過していることや、前述したとおり、モンゴルと日本との間には歴史認識・領土問題等の対立が存在せず、その分日本の保守層が好感を持ちやすいことが考えられる。

また、JGSS-2006では人間の本性⁽¹²⁾についての回答者の考え方を尋ねており、人間の本性が本来「善」であるとする人ほど、外国への好感度が高く、また「悪」であるとするほど、外国に対しても好感を持たないと予想される。しかし、分析の結果、モンゴルの好感度が最も低いのは、人間の本性について「善」と「悪」との中間と回答した層であった。

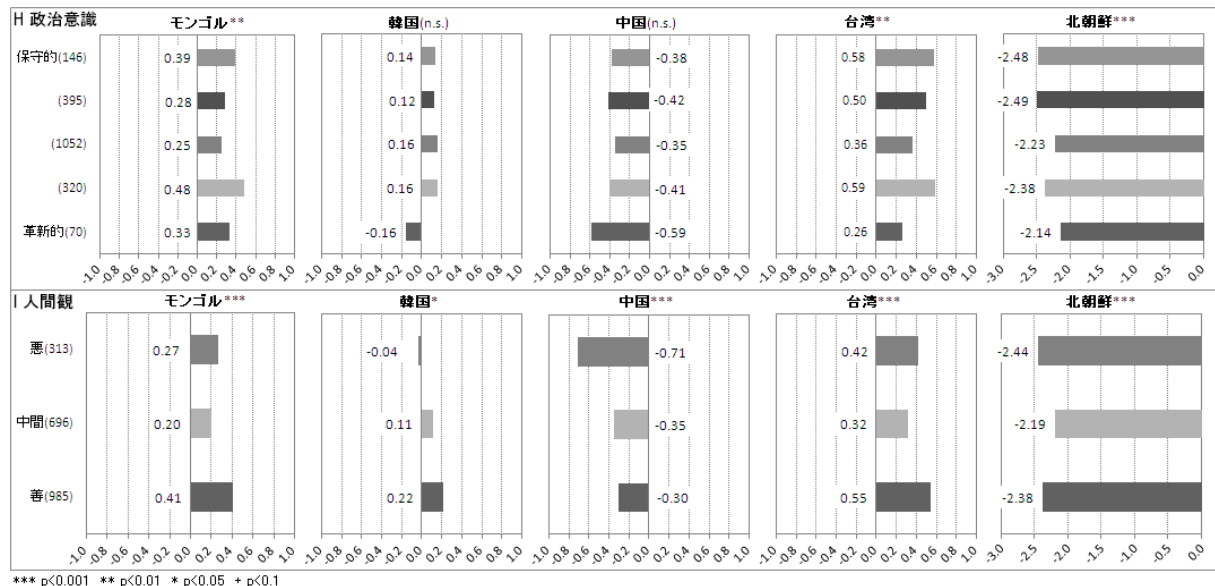


図7 独立変数と国別好感度の関連 (3. 政治・社会意識)

(3) 対外接触

外国に関する情報の入手程度や、外国人との接触頻度に関する変数は、モンゴルを含む各国・地域の好感度に関連を持つものと考えられる。ここでは対外接触に関し、JGSS-2006で尋ねている変数と、好感度との分析を試みた。結果は図8に示されている。

まず、外国人との接触頻度については、「時々ある」と「よくある」との間でわずかに減少している点ものの、それ以外では頻度の拡大に応じて好感度が上昇している。これまでの研究で、外国人との接触頻度の拡大が外国人への偏見や排外意識を低減することが示されているが(大槻, 2005, Nukaga, op.cit) モンゴルの好感度についても、同様に上昇させる効果があることが示されている。

次に、地域における外国人増加への賛否について見る。外国人増加への賛否は外国人への感情を直接的に表すものであり、賛成する層の方が、反対する層より好感度が高いと予想される。分析の結果、モンゴルはもとより、北朝鮮を除く各国・地域について、賛成する層の好感度が反対する層のものを上回った。

次に、英語・外国語に関する変数との関連について検討しよう。外国語、特に英語の使用程度や能力の高低は、海外に関する情報収集能力の高低に結びつくものであり、収集した情報を通じ、外国の

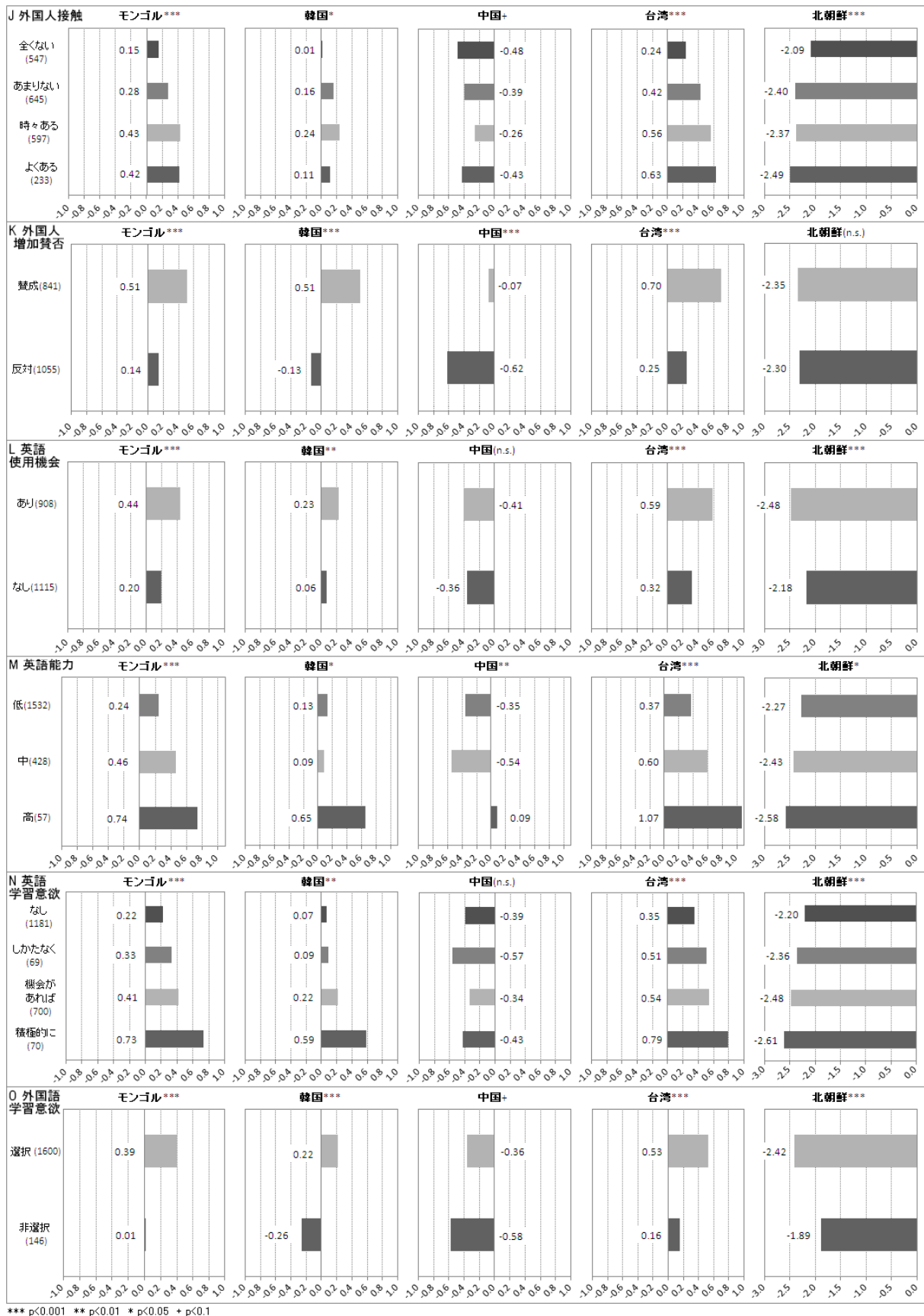


図8 独立変数と国別好感度の関連 (4. 対外国・外国人接触)

好感度にも関連するものと考えられる。そこで、まず英語使用機会の有無⁽¹³⁾について、モンゴルの好感度との関連を見たところ、有意な正の影響が確認された。同様に、英語能力⁽¹⁴⁾および英語学習意欲、さらに、英語以外の外国語の学習意欲についても、モンゴルの好感度への有意な正の影響が見られた。他国・地域的好感度について見ると、これらすべての変数からの有意な正の影響がみられるのは台湾だけであり、モンゴルの好感度は台湾のものとならび、英語・外国語の運用による影響を強く受けていることが分かった。

4. まとめ

日本とモンゴルとの関係は、今後経済・政治・文化等、幅広い面で拡大することが見込まれる。したがって、日本人がモンゴルに対し、どのような印象を抱いているのかを理解することは、今後両国が相互に理解を深めるためにも、重要な意義を有している。

本稿では JGSS-2006 のデータに基づき、モンゴルの好感度について、東アジア各国・地域との比較という観点から分析を行った。分析の結果からは、東アジア各国・地域におけるモンゴルの好感度の高さが確認された。これはモンゴルにとっては朗報と言えるものであるが、一方でモンゴルについて特段の印象を持たない回答者が 6 割以上を占めていることから、今後モンゴルが日本との良好な関係を維持、拡大するうえで、モンゴル人自身がそれらの層に対し、有効なアピールを行い得るかどうか鍵を握る。

このほか、分析からは読書量がモンゴルの好感度に正の影響をもつ点も確認された。すでに見てきたように、日本文学の中で一般に知られている作品には、モンゴルに題材を求めた例が見られる。それらの作品はモンゴルへの好感の醸成に貢献していると考えられるが、2.1 で見た芝山による批判や、チンギス・ハーンを題材にした日本文学に対する鈴木（2007）の批判が示すように、それらの作品が史実やモンゴルの実態を的確に反映していない点は注意が必要である。すなわち、読書量が多くなることによって、モンゴルへの誤解や幻想が生じている危険が存在するのである。誤解や幻想に基づく好感は、現実のモンゴルを正確に認識するうえで妨げとなるばかりか、モンゴル人と日本人との衝突をもたらす火種にもなりかねない。そのような誤解や幻想を解き、また未然に防ぐことは、モンゴルに関する書物を記す者の責務である。

最後に、残された課題について触れておきたい。国別好感度は外国に対する印象が好ましいか、好ましくないかを尋ねるものであり、それゆえ国際比較を含む量的分析には適している。しかし、外国に対するイメージについて検討する際、好悪以外の側面を捨象する点については議論の余地があろう。それゆえ、モンゴルを含む外国に対するイメージをより詳細に把握するためには、大規模調査を含む多様なアプローチを組み合わせた研究が求められる。また、本稿ではモンゴルと東アジア各国・地域との比較に主眼を置いたため、モンゴルの好感度に関する多変量解析を行わなかった。しかし、モンゴルの好感度の構造を検討するうえで、これは不可欠な課題であり、今後早急に取り組みたいと考えている。

[Acknowledgement]

日本版 General Social Surveys (JGSS) は、大阪商業大学 JGSS 研究センター（文部科学大臣認定日本版総合的社会調査共同研究拠点）が、東京大学社会科学研究所の協力を受けて実施している研究プロジェクトである。東京大学社会科学研究所 SSJ データアーカイブがデータの配布を行っている。

1980 年から 1999 年までの出入国統計入手に際し、大阪入国管理局からのご協力を得ました。また、データ分析に当たっては、早稲田大学理工学術院篠崎武久准教授、大阪商業大学総合経営学部保田時男専任講師から詳細なご教示を頂きました。特に記して感謝申し上げます。

[注]

- (1) 「モンゴル」という概念の指示対象は時代や文脈によって大きく異なる。現在に限っても、「モンゴル」は独立国家「モンゴル国」と、南モンゴル(中国内モンゴル自治区にほぼ相当)のいずれをも指し示すことが可能である。本稿では議論の性質上、「モンゴル」は現在の「モンゴル国」(1924年から1992年までは「モンゴル人民共和国」)を表すこととする。
- (2) この調査はウランバートル6地点および地方5地点の計11地点において、2004年10月から12月にかけて実施された。対象者数は2,000人で、調査方式は対面調査である。ただし、サンプルの抽出方法については示されていない。調査の詳細は外務省ホームページを参照されたい。
- (3) 小谷部が「義経=成吉思汗説」を提唱した直後の論争の激しさは、彼自身の再反論(小谷部、1924)からうかがうことができる。
- (4) 明治末から昭和18年の新聞記事を収集した神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ新聞記事文庫で検索を行うと、「外蒙」でのヒット数が183件であったのに対し、「満蒙」でのヒット数は1905件にのぼる(神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ新聞記事文庫)。
- (5) 法務省(年刊)によれば、日本からモンゴルへの出国者は1989年の345人から2000年の10613人に、モンゴルから日本への入国者は、1989年の194人から2000年の3662人に、それぞれ増加している。
- (6) 一方で、横綱朝青龍が巡業を欠席してモンゴルでサッカーに興じる姿が報道され、それ以来朝青龍の品行が問題視されるようになった。このことがモンゴルやモンゴル人への悪印象を与えた可能性も考えられるが、これは調査時点より後の2007年に起きた問題であり、調査結果には何ら影響していない。
- (7) 1979年以前は国・地域別出国者の総計しか記載されていない。また、2001年以降は、同年7月に日本人出入国記録が廃止されたため、国・地域別の出国者集計自体が存在しない。
- (8) Schefféの方法による多重比較に際してはR ver2.8.1を用いた。Rの詳細については、R Development Core Team (2008)を参照。
- (9) モンゴルを含む外国の好感度と関連する変数としては、これら以外にメディア接触に関するものが考えられる。メディア接触と外国への意識はそれ自体重要なテーマであり(伊藤・河野, 2008)、実際、モンゴル以外の国・地域の好感度に関しては、メディアの影響を示唆する研究もある(田辺, 2008)。しかし、新聞講読頻度およびテレビ視聴時間とモンゴルの好感度との分析を行ったところ、有意な結果は得られなかったため、本稿では議論の対象から除外している。
- (10) ここでは面接票問42のうち、本人学歴の回答結果を、旧制尋常・高等小学校、新制中学卒を「中卒」、旧制中学・高等女学校、旧制実業・商業学校、旧制師範学校、新制高校卒を「高卒」、旧制高校・専門学校・高等師範学校、旧制大学・大学院、新制高等専門学校、新制短大、新制大学・大学院を「大卒」としてコードした。
- (11) JGSS-2006コードブックに記載された職業コード(大阪商業大学比較地域研究所・東京大学社会科学研究所編, 2008:263-269)の職業コードを基に、面接票問7の結果をコードした。
- (12) JGSS-2006では留置A票Q65において、「人間の本性について、あなたはどのようにお考えですか。番号(1~7)を1つ選んでください。」と尋ねている。ここで、1は「人間の本性は本来『悪』である」となっており、7の「人間の本性は本来『善』である」に近づくにしたがい、より肯定的な人間観を表すことになる。本稿の分析では、1から7のうち中央に位置する4を「中間」とし、中間より「悪」寄りの回答である1から3を「悪」、「善」寄りの回答(5から7)を「善」に分類した。
- (13) 留置A票Q15で、選択肢1「仕事」から6「その他」のうち、1つでも選択した回答者を「あり」、それ以外の回答者を「なし」に分類した。
- (14) 「英語能力」は、留置A票Q16・Q17の回答結果を逆順化した上で合算した結果に基づいてい

る。いずれの設問も5点尺度となっており、したがって最低点は2、最高点は10となる。ここでは乱雑さを避けるために、2-4を「低」、5-7を「中」、8-10を「高」としてまとめた上で図示している。

[参考文献]

- 有馬学, 2002, 『日本の歴史第23巻 帝国の昭和』講談社.
- ボルドバートル, J., ジャンバルスレン, G. (訳), 1998, 「二十世紀におけるモンゴルと日本の関係」『自由』平成10年6月号, 43-52.
- 井上靖, 1960=1964, 『蒼き狼』新潮文庫.
- 伊藤陽一, 河野武司編, 2008, 『ニュース報道と市民の対外国意識』慶応義塾大学出版会.
- 法務省大臣官房司法法制調査部, 年刊『出入国管理統計年報』.
- 笠間千浪, 1992, 「ナショナリズムとレイシズムの交錯 - 《ネーション=ステイト》イギリスの歴史と現実」梶田孝道編『国際社会学 - 国家を超える現象をどうとらえるか』名古屋大学出版会, 241-266.
- 片倉穰, 1998, 『日本人のアジア観 前近代を中心に』明石書店.
- 片倉穰, 2004, 「日本の中のモンゴル」『歴史研究』519:44-50.
- 小矢部全一郎, 1924, 『成吉思汗は源義経也 著述の動機と再論』富山房.
- 楠弘閣, 1939, 「好性より観たる現代日本學生の世界諸民族品等の一研究」『心理學研究』14(特輯):88.
- 楠弘閣, 1941, 「民族好性品等の研究」『心理學研究』16(2):64.
- 楠弘閣, 1951, 「現時に於ける我國青年學生の民族好悪」『心理學研究』21(3-4):120.
- 湊邦生, 2008, 「途上国援助に対する日本人の意識と行動 - JGSS-2006 データからの検討 - 」『日本版 General Social Surveys 研究論文集』7:57-67.
- 三瀬秀一, 1993, 『ジンギス・カンの国へ』丸善ライブラリー.
- 宮脇淳子, 2002, 『モンゴルの歴史 遊牧民の誕生からモンゴル国まで』刀水書房.
- Nukaga, Misako, 2005, “Xenophobia and the Effects of Education: Determinants of Japanese Attitudes toward Acceptance of Foreigners” *JGSS Monographs*, 5:191-202.
- 大阪商業大学比較地域研究所・東京大学社会科学研究所編, 2008, 『日本版 General Social Surveys 基礎集計表・コードブック JGSS-2006』.
- 大塚勇三(再話), 1967, 『スーホの白い馬』福音館書店.
- 大槻茂実, 2006, 「外国人接触と外国人意識 - JGSS-2003 データによる接触仮説の再検討 - 」『日本版 General Social Surveys 研究論文集』5:149-159.
- 司馬遼太郎, 1978, 『街道をゆく 5 モンゴル紀行』朝日文庫.
- R Development Core Team, 2008, *R: A Language and Environment for Statistical Computing*, R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. (<http://www.R-project.org>)
- Rossabi, Morris, 2005, *Modern Mongolia from Khans to Commissars to Capitalists*, University of California Press.
- Said, Edward W., 1978, *Orientalism*, Penguin Books, London.
- 芝山豊, 1998, 「村上春樹とモンゴル もう一つのオリエンタリズム」『モンゴル研究』17:36-47.
- 芝山豊, 2007, 「日本文学にあらわれたモンゴル人」『清泉女学院大学人間学部研究紀要』4:71-80.
- 芝山豊, 2008, 「『蒼き狼』とオリエンタリズム」『清泉女学院大学人間学部研究紀要』5:29-41.
- 鈴木道子, 2007, 「チンギス・ハーンとオリエンタリズム - 日本人がチンギス・ハーンを物語る意味 - 」『中央大学現代社会学部紀要』1(2):89-119.
- 田辺俊介, 2004, 「国別好感度から見る『日本人』の世界認知」『日本版 General Social Surveys 研究論文集』3:199-223.
- 田辺俊介, 2008, 「『日本人』の外国好感度とその構造の実証的検討」『社会学評論』59(2):369-386.

[URL]

オイドブ・バトバヤル, インターネット公開論文, 『第二次世界大戦後のモンゴルにおける日本人軍事捕虜』(2009年1月21日ダウンロード).

rc-h.slav.hokudai.ac.jp/publicn/81/page_5969.pdf

外務省ホームページ

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/>

神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ新聞記事文庫

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/>

内閣府「外交に関する世論調査」

<http://www8.cao.go.jp/survey/index-gai.html>